

心の奥行き形成と自我の育ちに関する考察(Ⅱ) — 限界を乗り越える過程と自我の育ち —

○ 西垣吉之 ・ 寺見陽子 ・ 西垣直子
(中部学院大学短期大学部) (神戸親和女子大学) (黒野保育園)

＜研究の目的と方法＞ ここでは3歳に焦点をあて、自分の持つ限界を前向きに受け止められるようになる過程を追いながら、自己の限界への気付きとそれを乗り越える過程と心の奥行きを形成する過程との関連について考察する。ここでいう「乗り越える」とは、今の自分の持つ限界を前向きに受け止め対処しようとする思いが生まれる過程と考えた。3歳を対象にしたのは、自分の可能性を信じられる反面、その限界を自分なりに対処して乗り越えていこうとする気持ちが育つ時期と考えたからである。

＜事例と考察＞ 1、限界を感じない3歳児

＜事例1＞3歳児クラス お弁当をクレパスで描いてそれを切りぬいて、お弁当箱に見立てた箱に入れてお弁当を作っている場面。B男が「見て、見て」と私(筆者)の手を引いて連れていってさっそく見せてくれる。するとクラスのあちらこちらから、「これねバナナ!」「これからあげ」「これはね…」とみんなが自分の描いたものを見せてくれる。こちらは、「おいしそうだね」とか「大きいバナナだね」などと受け止めるのだが、それはどう見ても子ども達が主張する物には見えない。

自分がしていることをほぼ、無条件で受け止められているという実感は、子どもが自分が生きていいんだという自己存在感を持つために、また未来の自分への肯定的なイメージをつくるための基盤である。これからの自分の開かれた可能性を信じ、自分の限界に鈍感であることがこの時期の子どもらしさといえる。

2、あんなふうになりたい未来の自分と現実の自分

＜事例2＞0歳児担任の保育者が、A子(3歳児)に「だれのお母さん?」と通りすがりに尋ねられた。「先生は黄組(0歳児クラス)のお母さんだよ」というと、「～ちゃんも黄組にはいるんだ」というので「～ちゃんってAちゃんの下の子?」と聞くと「桃組(4歳児クラス)のNちゃんちの赤ちゃん」と答えた。その後「そういえばAちゃんも来年桃組だね」と言う。「私ほんとうは青組(年長組)になりたいの。でもまだお泊まりできないもん」と答えた。

年長組にはなりたいが、年長組になると親元から離れて保育園に泊まるお泊まり会のことを思うと、今の

自分ではお泊まりすることはできないだろうという思いを持っているA子の姿である。こうした気持が生まれる背景には、年長組になったときの自分をイメージすることができる育ちがある。自分の中に「あんなふうになりたい」という未来の自分の輪郭を感じているのである。しかし、お泊まりするということが自体は、彼女の現実の生活の一部として実感できることであり、あんなふうになりたいという「未来の自分」と、でもできない「現在の自分」との狭間に立って葛藤しながらも、そうしたとらえをしている自分の心の状態を調整している姿でもある。

3、限界を受け入れるために必要な自己への信頼感

＜事例3＞粘土でお団子づくりを楽しんでいたH男の隣でK子が大きな粘土の固まりを丸めようと粘土板にたたきつけていた。K子はその固まりから小さい団子をいくつも作ろうとしてた。粘土板に何度たたきつけても手でちぎろうとしてもなかなか思うような形にならないようだ。徐々にK子の目には涙が浮かび、ついに「うわあ～ん」と泣き出してしまった。すると隣にいたH男が「これで小さくするんやよ」とへらをつかってやってみせた。K子は泣きながらもH男の話を聞き自分でやってみた。こつがつかめた上にへらで切ることが楽しいようで、包丁のようにへらを使い、切ることを楽しんでた。

K子は乗り越える手だてをH男から具体的に伝えられることで、その状況をクリアすることができることを実感している。しかし、自分の限界にどう対処していいかがまだ分からないでいるから、泣くのである。しかし、たとえ具体的な手だてを伝えられたとしても、そこにこうすればこうなるんだという未来の自分、変化する自分への期待感・自己を信頼する気持が形成されていなければ、H男の提案を受け入れられなかったのではない。他者の意見を受け入れ限界を乗り越えるためにもこうした育ちが必要だと考える。

4、自分に限界があることを受け入れ、それを友達の支えによって乗り越える心地よさを味わう

＜事例4＞3歳の1月、S子が刺身用のトレイを保育者のところに持ってきて、「せんせい、これ半分に切って」と言ってきた。保育者が「自分でがんば

ってやってごらん。先生見てあげるから」というと、素直に聞き入れやり始めた。はさみが中央まで進んでいくと、刃先が発砲スチロールに両側から押されるらしく進まなくなった。S子が「切れない」と訴えてきた時、それまでの経緯を見ていたA子が「私が切ってあげる」といって、A子からトレイとはさみを譲り受けた。A子はS子が切っていた方向とは反対の方向からトレイを切り始めた。あっという間に切れたトレイをA子はS子に「はい」といって手渡すと。S子はうれしそうに受け取った。

この事例でS子は自分で自分の限界を決めていることがわかる。そして、“一人で切れないこと”それ自体をどのように打開するかという手だてとして、他者に助けられることを選択した。自分一人ではできなかったことで卑屈になることなく、A子に手伝ってもらうことを素直に受け入れ、他者によって助けられる心地よさを実感しているのである。また、A子は困っているS子のために自分がしてあげられることを提供することで、S子に喜んでもらうことになる。それは彼女自身の喜びにつながっているのだろう。言い換えれば他者であるS子の限界を感じ、それを助けるという行為によって受け入れていく姿でもある。この事例は、まさに「助けることの心地よさ」「助けられることの心地よさ」をお互いに実感する子どもの姿である。

こうした助け一助けられることが可能になる基盤には自分が助けられる心地よさを味わうという体験があるものと考ええる。また、他者とのかかわりの中で、事例3・4とも他者の陥った物理的な状況を理解しながら、相手がしようとしている課題を克服できない限界を感じるとともに、相手が味わっている心の動きを共有しつつ、自分の対処の仕方を考えられるようになる育ちを捉えることができる。

5. 限界を受け入れ、未来に開かれた自分を感じる

＜事例5＞両端に同じ高さの積み木を置き、その上に板積み木を置く積み方を保育者がD男に教えていた姿を見ていたY男が、保育者が伝えた同じ方法で積み木を積み始める。Y男は一段積み終わると、積んだ自分の積み木の全体像を見渡し、また積み続ける。その行為を数回繰り返す。高さのために積みにくくなってくると、Y男は積み終わるたびに、にこっとする。背伸びをして手を伸ばすぎりぎりまで積み上げたところで、Y男は保育者に向かって、「先生、ほら！」と承認を求めた。保育者が「すごい。高く積めたね」というととても満足げにうなずく。しばらくその積み木を見渡してから、Y男は次に自

分の身長よりも高いところに載せた積み木を一つずつ取り除き、今度は縦ではなく裾野を広げていくように、ゆっくりと慎重に積み直していく。自分の腰の高さのあたりまで積み直したところで、再び満足げに見渡していた。

Y男は、まず、この活動で“こんなことができるんだ”という新たな自分の力への気づきを感じている。それは今までとは違う素敵な自分の発見、あるいは内在するもう一人の自分の発見と解釈してもよいのではない。自分が積み上げた積み木をしきりに見るというY男の行為は、自分のしている行為に対する充実感を表している。さらに、より高くしたいという感情からくる課題を実現させるために、「どのように積むか」という知的な働きへと及んでいる。

自分の行為によって積み木が変化する様子を捉えるという行為は、自分の内なる世界に起こっている動きをそこで感じながら活動を進める姿でもある。つまり、Y男は積み木という「モノ」とかかわりながら自分の内なる世界をモノに投影させて表現していると同時に、投影されたモノの変化をとらえながら自分の内で起こっている世界を確認しているようにみえる。

Y男は、この遊びの中で様々な気持ちのコントロールを経験している。高く積んでいくと倒れるかもしれないから慎重に行動すること、これ以上高く詰めないから横に広げようということ、バランスを保ちながら高く積むために左右同じ高さで積むということなど、それら一つ一つの行動が、Y男の自我の育ちを表しているようにも思われる。また、自分の限界に達したとき彼はそれをとても満足そうに見た。限界を認めながらも、それを切り返し、今自分ができるところへ置き換えていく姿がここでは語られている。そこには、自分にこんなことができるという前向きな意味での受け入れと、自分には限界があるということを素直に受け入れるという、2つの意味が隠されている。まさに、こんなことができる自分も限界がある自分も自分なのだと感じたのではないだろうか。

この事例が今までの事例と異なる点は、他者との関わりの中かで自分の限界を見据えていく姿から、自己内で自分の限界を見据え、自分の中でその限界を昇華していく姿にある。

＜まとめ＞3歳は限界を受け入れていくために自己への信頼感を確立し、それを基盤に人の支えを受け入れ、葛藤を乗り越えていく時期であり、自らが未来に開かれていることを実感し、自己内で限界を昇華しながら心に奥行きを形成する転換点ということができる。